母のパーソナリティ							
NS							
HA		.106 *					
RD							
P							
SD							.099 *
C			.105 *			.107 *	
ST							.108 *
N	521	519	539	535	506	501	525
R^2	.013	.011	.011	.013	.017	.012	.020

* P < .05; ** P < .01; *** P < .001

D．考察

今回の研究結果からは第一に，両親の養育態度が子どものパーソナリティの重大な予測因子となることが示唆された．子のパーソナリティと母子関係についての先行研究は多いが父子関係についての研究は少ない．今回の調査では，子に対する母親の養育態度の寄与とともに父親の養育態度の寄与も明らかにされた．父のケア得点は子の気質の部分では 新奇性追及，報酬依存，持続と関連し，性格の部分では自己志向性，協調性 に影響を与えている．父から愛情深く接してもらえていると感じている子どもは落ち着いていて暖かく忍耐強くて自立心にとむ．母親のケア得点は 気質部分の新奇性追及，損害回避，報酬依存，持続に，性格の部分では自己志向性，協調性，自己超越性 に寄与していた．さらに母親の過干渉得点は子の気質，損害回避，性格の自己志向性，協調性，自己超越性 に寄与している．母親が過干渉的であることが子の損害回避を強くして行動の抑制や人見知り，予期懸念につながり自立心の成長を妨げ，社会的な無関心や利己主義につながるのかもしれない．一方で父親の過干渉は子のパーソナリティになんらの影響も与えていない．この年代の子どもにとってはそれまでの強い母子関係からの自立の時期であり，母親に対する注目が強調されることによって，父に対して過干渉と感じることが少ないのかもしれない．父母に暖かく愛情深い態度で養育してもらったと感じている子どもほど，より落ち着いた行動がとれ秩序のある行動がとれる．暖かく思いやりがあり社会に愛着を持つことができる．忍耐強く目的志向性で自己責任がとれ，臨機応変な行動がとれる．社会的受容性が豊かで，社会に対する関心が強く共感的で協力的，同情心があり，純粋な良心を備えた協調性を獲得できるということであろう．反対に両親の養育態度が無関心で拒絶的であると感じている子どもほど衝動的で激しやすく興奮しやすい．社会に愛着を感じることがなく思いやりに欠け持続せずあきやすい，自己受容ができず目的志向性に欠ける，社会に対して無関心であり利己主義であるということであろう．

次に両親のパーソナリティの子のパーソナリティへの寄与については，子の気質の部分である損害回避と父母両方の損害回避が関連しており遺伝的な寄与が示唆された．子の報酬依存には父母の協調性が関連している，父母が協調性をそなえ，社会を受容し，共感に富み，協力的であれば，その子どももまた思いやりがあり社会的な愛着心をもった協調性のある性格の発達が期待されるということであろう．子の性格部分である自己志向には父の損害回避と持続が関連していた．楽観的で安心感を与え，力強く向上心があり忍耐強い父のパーソナリティは自立心豊かな子どもの成長に貢献するということであろう．子の 協調性が父母の協調性に影響を受けているという結果からは親の社会的な受容性や共感，良心に富んだパーソナリティが子の協調性に寄与するだろうことが容易に想像できる．

両親の態度が暖かく愛情深く過干渉でないと子どもが感じているような養育態度，そして父母の性格が協調的であるということが，子どもの協調性に寄与するという示唆は重大である．協調性のある個人は寛容で同情的で協力的であり他人の権利に対する関心をもち，自尊心と高い相関があり，協力性や共感性はしばしば発達心理学においては成熟のサインとみなされる（木島，1996）．Cloninger は 自己志向性，協調性，自己超越性という性格の次元の組み合わせによるパーソナリティの傾向を表して，特に協調性 が低いとパーソナリティ障害のおそれがあると指摘している．協調性は他者の確認と受容に関する個人差を説明するものとして規定されている．人格障害に最も関与が高いのが協調性であり TCI によって測定される自己志向性の低さと協調性の低さがパーソナリティ障害の核をなしている（Svrakic ら，1993）と考えられる．養育態度と自己志向性が外傷後ストレス障害の防御力に関連するという亡命者についての研究

（Ghazinour ら，2003），性的幼児虐待の被害者にとって父親的なサポートがコーピングスタイルの予測因子となるとの報告（Guelzow ら，2002）があり，養育環境の影響が示唆されている．

このような知見と近年の日本の青少年のパーソナリティの発達課題とを合わせて考えると，今回の結果からの，子のパーソナリティの発達に与えるであろう養育態度の影響という示唆は重要である．特に母親の子どもに対するケアが良い予測因子であるとすれば，母親に対する多面的な支援や介入を効果的に行うことによって，子どものパーソナリティ発達に間接的な応援を可能にするかもしれない．さらには父親のケアの寄与が示唆されたことからは，子の養育における父親の役割，参加に積極的な意味を期待できるものである．

父母の養育態度とパーソナリティとが子のパーソナリティへ寄与するという今回の結果は重要な知見ではあるが，子どものパーソナリティの成熟を規定しているものは，複雑で多面的である．いずれにしても R2（決定係数）が低いことからしても子どもの性格形成には他の多様な寄与因子を考慮にいれる必要があるということであろう．兄弟関係，親の離婚，片親，保護者のいない子どもたち，継父母，家族の死，問題的な飲酒，児童虐待ネグレクトのような家族に関連する環境，疾患や通院入院というような健康に関連する問題，友人，教師，学業，その他の学校関連の問題等々，多面的な寄与因子を考慮にいれた今後の研究が期待される．

文献

Cloninger, C. R. Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. Archives of General Psychiatry, 50, 975-990.

Cloninger, C. R. (1997). A systematic method for clinical description and classification of personality variants: a proposal. Archives of General Psychiatry, 44, 573-588.

Dodge, K. A. (1983). Behavioral antecedents of peer social status. Child Development, 54.,1386-1399.

Dodge, K. A. , Lochman. J. E., Harnish, J. D., Bates, J. E. & Pettit, G. S. (1997). Reactive and proactive aggression in school children and psychiatrically impaired chronically assaultive youth. Journal of Abnormal Psychology . 106, 37-51.

Egeland, B., Sroufe, L. A. ,& Erickson. M. (1983). The developmental consequence of different patterns of maltreatment. Child Abuse and Neglect, 7, 459-469.

Ghazinour M., Richter J.,Emami H., Eisemann M. (2003). Nord Journal Psychiatry, 57, 419-428.

Guelzow , Jennifer W., Cornett P.,F., Dougherty T., M.(2002).Journal of Child Sexual Abuse, 11, 53-72.

Grusec,J. E. & Goodnow, J. J. (1994). Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: a reconceptualization of current points of view. Developmental Psychology, 30,4-19.

Joyce, P.R., Mckenzie, J.M., Loty, S. E., Mulder, R. T., Carter, J. D., Sullivan, P.F., Cloninger, C. R. (2003). Temperament childhood environment and psychopathology as risk factors for avoidant and borderline personality disorders. Australian and New Zealand Journal of Psychiatry ,37,756-764.

木島伸彦，斉藤令衣，竹内美香，吉野相英，大野裕，加藤元一郎，北村俊則（1996）. Cloninger の気質と性格の 7 次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI). 精神科診断学, 7, 379-399.

Kitamura, T., Kijima, N., Iwata, N., Senda, Y., Takahashi, K., & Hayashi, I. (1999a). Frequencies of child abuse in Japan: hidden but prevalent crime behind the door. International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology, 43, 21-33.

Kitamura, T., Kijima, N., Sakamoto, S., Tomoda, A., Suzuki, N., & Kazama, Y. (1999b). Correlates of problem drinking among young Japanese women: personality and early experience. Comprehensive Psychiatry, 40, 198-114.

Kitamura, T., Tomoda, A., Kijima, N., Sakamoto, S., Tanaka, E. & Iwata, N. (1999c).Temperament and character in relationship with early life experiences in young women. Manuscript submitted for publication.

Koestner, R., Zuroff, D.C. & Powers, T. A. (1991). Family origins of adolescent self-criticism and its continuity into adulthood. Journal of Abnormal Psychology, 100, 191-197.

Loeber, R. & Dishion, T. J. (1984). Boys who fight at home and school: family conditions influencing cross-setting consistency. Journal of Abnormal Psychology, 105, 369-380.

Loranger, A., W., Oldham, J. M., Oldham, J. M. & Tulis, E. H. (1982). Familial transmission of DSM-III Borderline Personality Disorder. Archives of General Psychiatry, 39, 793- 799.

村瀬嘉代子（1998）. 心理療法のかんどころ. 金剛出版

Parker, G. (1979). Parental characteristics in relation to depressive disorders. British Journal of Psychiatry, 134-147.

Parker, G. (1983). Parental 'affectionless control' as an antecedent to adult depression: a risk factor delineated. Archives of General Psychiatry, 40, 956-960.

Parker, G. & Hadzi-Pavlovic, D.(1982). Parental representations of melancholic and non-melancholic depressives: examining for specificity to depressive type and for evidence of additive effects. Psychological Medicine, 22, 657-665.

Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, 52, 1-10.

厚生科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）

研究協力報告書

児の外向性問題行動を規定する
児のパーソナリティおよび親のパーソナリティと養育態度についての研究

研究協力者

平村　英寿　　熊本大学大学院臨床行動科学分野
宇治　雅代　　熊本大学大学院臨床行動科学分野
鹿井　典子　　熊本大学大学院臨床行動科学分野
陳　　孜　　熊本大学大学院臨床行動科学分野
松岡　奈緒　　熊本大学大学院臨床行動科学分野

主任研究者

北村　俊則　　熊本大学大学院臨床行動科学分野

研究要旨

児童の外向性問題行動と幼少期に受けた両親からの養育および児と両親双方の気質・性格との関係を調査するために，小学校５年生から中学校３年生を対象として県内の小中学校にアンケート調査への協力を依頼し，1549家庭分の調査票を回収した．遺伝的に規定されているとされる両親の気質は児の外向性問題行動に影響を与えておらず，父親の自己志向性が高い，つまり自己責任と目的志向性が強く，臨機応変で自己受容ができる父親の子ほど攻撃的行動と非行的行動が低いという結果がでた．また，遺伝的に規定されている新規性追求，つまり探究心が強く，衝動的で，無秩序な子供ほど攻撃的で，児の非行的行動は低い損害回避性と低い協調性，つまり不確実性に対する恐れが少なく，抑制が低く，社会的に不寛容・無関心で利己的な子供において多く見られた．両親の養育態度との関係から見れば父親が子供の自立と自律を尊重するような養育態度は攻撃性を下げるが，母親の養育態度は児の攻撃的行動と非行的行動に寄与していないという結果であった．

A．研究目的

近年，発達心理学分野における研究成果の蓄積によって，早期に顕在化する外向性問題行動を伴った若年者（特に男性）は注意欠陥多動性障害，言語機能 / 遂行機能の障害，顕著な家庭問題と関係があるということが明らかになり，後に持続する反社会的問題行動との関連も示唆されている．その様な児童の危険因子として遺伝的変数，新生児期変数，気質的変数，心理生物学的変数，家族相互作用的変数，社会文脈的変数などが調査されてきた (Moffit, 1993; Rutter et al., 1998)．また，児童期発症と思春期発症との相違に関する研究も進みつつある (Moffit & Caspi, 2001).

今回，我々は児の外向性問題行動を規定する因子として両親の養育態度，児本人の気質・性格，両親の気質・性格を独立変数として解析を行った．本研究は，小学校 5 年生 (10 歳) から中学校 3 年生 (15 歳) の外向性問題行動を規定する幼少期に受けた両親からの養育および児と両親双方の気質・性格との関係を調査し上記の研究課題に答えようとするものである．

B．研究方法

対象

小学校５年生から中学校３年生を対象として県内の小中学校にアンケート調査への協力を依頼し，1549 家庭分の調査票を回収した．

方法

1) 児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)と両親のパーソナリティ：児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)を従属変数，児の学年，性別，外向性問題行動と有意な相関のあった両親の TCI の下位尺度得点を独立変数として重回帰分析を行った．
2) 児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)と児のパーソナリティ：児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)を従属変数，児の学年，性別，児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)と有意な相関のあった児の TCI 下位尺度得点を独立変数として重回帰分析を行った．
3) 児の外向性問題行動 (攻撃的問題行動と非行的問題行動)を従属変数，児の学年，性別，両親の養育態度を独立変数として重回帰分析を行った．

なお，本研究は熊本大学医学部倫理委員会の審査により承認を得た．

尺度

1. 児の外向性問題行動の評価

Child Behavior Checklist (CBCL; Achenbach ら，1983) 4～18 歳用を用いた．CBCL は児童の問題行動や適応能力の査定に用いられ保護者に回答を求める形式をとっている．引きこもり，身体的訴え，不安／抑うつ，社会性の問題，思考の問題，注意の問題，非行的行動，攻撃的行動の 8 つの下位尺度から構成されているが，本研究では外向性問題行動評価に限定して非行的行動 (13 項目) と攻撃的行動 (20 項目) の 2 つの下位尺度 (33 項目，3 件法) を用いた．日本語版は坂野ら (1995) によって作成されている．先行研究において，CBCL の評価者は父親か母親のどちらか一方によるものであったが，今回は父母両方の評価を反映させるべく両者に評価を依頼した．

2. 児および両親のパーソナリティの評価

TCI は Cloninger (1993) の気質と性格の 7 次元モデルを測定するために編集された自己記入式調査用紙であり 4 件法・240 項目で構成されている．Cloninger (1987) によれば，気質は遺伝的影響を受け，発達の初期から認められる行動の特徴であり，性格は周囲との相互作用から形成される特質であるとしている．

(1) 児のパーソナリティについては Junior Temperament and Character Inventory (菅原ら，1997) を用いた．この尺度は 108 項目，4 件法で，気質を構成する新規性追求，損害回避，報酬依存，固執と性格を構成する自己志向，協調，自己超越の計 7 つの下位尺度より構成されている．

(2) 両親のパーソナリティについては Temperament and Character Inventory (TCI) 日本語改訂版 (125 項目) を用いたが，下位尺度である Persistence (固執)の項目数が 5 項目と他の下位尺度に比べて極端に少ないと判断し，Temperament and Character Inventory (240 項目) の Persistence 下位尺度から 5 項目を抜粋し，125 項目版 TCI に追加して計 130 項目として用いた．日本語版は，木島ら (1996) が作成し，その信頼性，妥当性についても確認されている．TCI を Professor Cloninger の許可の下に Kijima ら (2000) が TCI の翻訳を行った．TCI およびその旧版である Tridimensional Personality Questionnaire は日本国内の患者人口および非患者人口で使用されている (Yoshino ら，1994; Kitamura ら，1999)．これらの日本語版尺度の内的整合性や因子構造については Tomita ら (2000) の報告がある．

3. 親の養育態度の評価

Parker ら (1979) が開発した Parental Bonding Instrument (PBI) を用いた．これは全 25 項目からなる自己記入式調査用紙で，被験者の 16 歳以前の幼少時期における両親の養育行動を回顧的に回答させるもので，本調査ではその日本語版 (25 項目) を用いた (Kitamura ら，1993)．下位尺度については宇治報告書の因子構造モデルに従った．つまり，Parker の唱える care に関する質問項目群と indifference/rejection に関する質問項目群が必ずしも正反対の意味ではなく，同様に overprotection に関する質問項目群と allowance of autonomy and independence に関する質問項目群も正反対の意味を表さなかったことから，indifference/rejection と allowance of autonomy and independence をそれぞれ care と overprotection の逆転項目として採点せずに別の質問項目群として以下のような表記を用いた．

+CFCARE, -CFCARE, +CFPROT, -CFPROT.
+CMCARE, -CMCARE, +CMPROT, -CMPROT.

PBI は，両親や同胞による他者評価と高い一致率を示すことから，養育行動の回顧的認識を意味するだけでなく，実際の養育行動を反映したものである可能性が示唆されている (Parker，1989)．また PBI は Parker (1979) が再検査法によって高い信頼性を確認している．

解析

解析は SPSS 10.0 を用いて行った．まず，児の外向性問題行動を基準変数とし，それぞれの説明

変数ごとに 相関係数を求め, 重回帰分析を行った.

従属変数：CBCL 得点

攻撃的行動得点, 非行的行動得点のいずれにおいても父親が母親よりも有意に高い得点をつけていた（表１）. 父親または母親のどちらかが CBCL の全項目数 (33 項目) を回答した 921 家庭を採用とし (表２), 攻撃的行動得点, 非行的行動得点を以下の換算式を用いて近似した.

表１. 父親と母親による攻撃的行動得点と非行的行動得点の t-test

	N	平均値	標準偏差	T 値
ペア1 父親による攻撃的行動 母親による攻撃的行動	489 489	5.8487 4.9714	5.63122 5.23380	3.367**
ペア2 父親による非行的行動 母親による非行的行動	509 509	1.1984 0.9155	1.75517 1.39555	3.540**

表2. 父親が答えた CBCL 項目数と母親が答えた CBCL 項目数のクロス表

		母親が答えた CBCL 項目数									合計
		0	20	22	28	29	30	31	32	33	
父親が答えた CBCL 項目数	0	602	1				2	3	11	300	919
	29										1
	30									1	1
	31									8	8
	32	2		1		1			4	19	27
	33	95						1	21	475	593
合計		699	1	1	1	1	2	4	37	803	1549

母親が答えた CBCL 項目数が33項目かつ父親が答えた CBCL 項目数が33項目の場合：
攻撃的行動得点 =(母親が評価した攻撃的行動得点 + 父親が評価した攻撃的行動得点) / 2.
非行的行動得点 =(母親が評価した非行的行動得点 + 父親が評価した非行的行動得点) / 2.

母親が答えた CBCL 項目数が33項目未満かつ父親が答えた CBCL 項目数が33項目の場合：
攻撃的行動得点 =(2 * 父親が評価した攻撃的行動得点 - 0.88*) / 2.
非行的行動得点 =(2 * 父親が評価した非行的行動得点 - 0.28**) / 2.

父親が答えた CBCL 項目数が33項目未満かつ母親が答えた CBCL 項目数が33項目の場合：
攻撃的行動得点 =(2 * 母親が評価した攻撃的行動得点 + 0.88*) / 2.
非行的行動得点 =(2 * 母親が評価した攻撃的行動得点 + 0.28**) / 2.

* 0.88 は父親が評価した攻撃的行動得点の平均値(5.8487) から母親が評価した攻撃的行動得点の平均値 (4.9714) を引いたもの.

** 0.28 はは父親が評価した非行的行動得点の平均値 (1.1984) から母親が評価した非行的行動得点の平均値 (0.9155) を引いたもの.

非行的行動得点において男児が女児より有意に高い得点を示した (表３).

表3. 男児と女児の外向性問題行動の t-test

	男児 (n=341)	女児 (n=421)	t 値
攻撃的行動	7.68 (8.88)	7.22 (8.00)	0.8
非行的行動	1.61 (2.62)	1.22 (1.96)	2.3**

** $P < .01$

独立変数：児の学年，性別，両親のTCI 下位尺度得点，児のJTCI 下位尺度得点，親のPBI 得点

児の学年は中学生1年生，2年生，3年生をそれぞれ7年生，8年生，9年生とし，性別は男児を1，女児を2とした．

C．研究結果

1．児の外向性問題行動 (CBCL)と両親の TCI

児の外向性問題行動得点 (攻撃的行動得点，非行的行動得点)と両親の TCI 下位尺度得点との相関を表４に示した．

表4. 児の CBCL 得点と両親の TCI 得点の相関係数

	攻撃的行動	非行的行動
父の新規性追求	.142**	.165**
父の損害回避	.077	.17
父の報酬依存	.-055	-.063
父の固執	-.004	.007
父の自己志向	-.189**	-.162**
父の協調	-.176**	-.132**
父の自己超越	.075	.093*
母の新規性追求	.111**	.098*
母の損害回避	.121**	.049
母の報酬依存	-.049	-.059
母の固執	-.047	-.002
母の自己志向	-.156**	-.077*
母の協調	-.148**	-.078*
母の自己超越	.020	.081*

* $P<.05$, ** $P<.01$

児の攻撃的行動得点を従属変数とし，第一段階に児の学年と性別，第二段階に児の攻撃的行動得点と有意な相関のあった父親の新規性追求，自己志向，協調，第三段階に児の攻撃的行動得点と有意な相関のあった母親の新規性追求，損害回避，自己志向，強調を独立変数として段階的に強制投入した (表５).

表5. 児の攻撃的行動と両親の気質・性格の重回帰分析

	児の攻撃的行動			
	R^2	ΔR^2	ΔF	β
Step1.	.064	.064	9.427**	
学年				-.065
性別				-.218**
Step2.	.126	.062	6.393**	
父の新規性追求				.020
父の自己志向				-.208**
父の協調				-.061
Step3.	.133	.007	.552	

母の新規性追求				.030
母の損害回避				.054
母の自己志向				.007
母の協調				-.051

$^{*}P<.05$, $^{**}P<.01$

児の非行的行動得点に関しても同様に，第一段階に児の学年と性別，第二段階に父親の新規性追求，自己志向，協調，自己超越，第三段階に母親の新規性追求，自己志向，協調，自己超越を独立変数として段階的に強制投入した（表６）.

表6. 児の非行的行動と両親の気質・性格の重回帰分析

	児の非行的行動			
	R^2	ΔR^2	ΔF	β
Step1.	.035	.035	4.954**	
学年				-.043**
性別				-.167
Step2.	.089	.054	3.971**	
父の新規性追求				-.002
父の自己志向				-.148*
父の協調				-.101
父の自己超越				.071
Step3.	.095	.006	.449	
母の新規性追求				.023
母の自己志向				.006
母の協調				-.077
母の自己超越				.007

$^{*}P<.05$, $^{**}P<.01$

児の攻撃的行動得点は男児であることと父親の低い自己志向性と関係があり，児の非行的行動得点は学年の低さと父親の低い自己志向性と関係があった（表５，表６）.

２．児の外向性問題行動 (CBCL) と児のパーソナリティ (JTCI)

児の攻撃的行動得点，非行的行動得点と児のJTCI 得点の相関を表７に示した.

表7. 児の攻撃的行動得点および非行的行動得点と児のJTCI 得点との相関

	攻撃的行動	非行的行動
児の新規性追求	.105**	.120**
児の損害回避	-.072	-.117**
児の報酬依存	-.030	-.055
児の固執	-.002	-.035
児の自己志向	-.009	-.019
児の協調	-.136**	-.126**
児の自己超越	.012	-.017

* $P<.05$, ** $P<.01$

児の攻撃的行動得点，非行的行動得点を従属変数とし，児の学年と性別，有意な相関のあった児の JTCI 気質得点，性格得点を 3 段階に分けて強制投入した．児の攻撃的行動得点は低い学年と新規性追求と関係があり，児の非行的行動得点は低い損害回避性と低い協調性と関係があった (表８，９).

表8. 児の攻撃的行動得点と JTCI 得点の重回帰分析

	児の攻撃的行動			
	R^2	ΔR^2	ΔF	β
Step1.	.009	.009	2.920	
学年				-.090*
性別				-.006
Step2.	.034	.025	16.665**	
児の新規性追求				.124**
Step3.	.037	.004	2.611	
児の協調				-.073

* $P<.05$, ** $P<.01$

表9. 児の非行的行動得点と JTCI 得点の重回帰分析

	児の非行的行動			
	R^2	ΔR^2	ΔF	β
Step1.	.008	.008	2.675	
学年				-.034
性別				-.046
Step2.	.036	.028	9.025**	
児の新規性追求				.058
児の損害回避				-.129**
Step3.	.044	.008	4.947	
児の協調				-.105*

$^{*}P<.05, ^{**}P<.01$

3．児の外向性問題行動（CBCL）と親の養育態度（PBI）

児の攻撃的行動得点，非行的行動得点と PBI 下位尺度得点の相関を表 10 に示した．

児の攻撃的行動得点，非行的行動得点を従属変数とし，児の学年と性別，有意な相関のあった PBI 下位尺度得点，性格得点を 3 段階に分けて強制投入した．児の攻撃的行動は－CFPROT が負の寄与を示したが，非行的行動に関しては有意な寄与は見出せなかった．

表10．CBCL 得点と PBI 得点の相関係数

	攻撃的行動得点	非行的行動得点
3. + CFCARE	-.024	-.068
4. - CFCARE	.089*	.104**
5. + CFPROT	-.026	-.015
6. - CFPROT	-.139**	-.116**
7. + CMCARE	-.049	-.016
8. - CMCARE	.086*	.098**
9. + CMPROT	.051	.073
10. - CMPROT	-.065	-.064

$^{*}P<.05, ^{**}P<.01$

表11．児の攻撃的行動得点および非行的行動得点と PBI の重回帰分析

	児の攻撃的行動得点				児の非行的行動得点			
	R^2	ΔR^2	ΔF	β	R^2	ΔR^2	ΔF	β
Step1.	.004	.004	1.084		.003	.003	.927	
学年				-.059				-.027
性別				.003				-.055
Step2.	.031	.027	8.335**		.014	.011	3.249*	
－CFCARE				.085				.079
－CFPROT				-.122**				-.060
Step3.	.033	.001	.837		.019	.005	2.805	
－CMCARE				.041				.076

$^{*}P<.05, ^{**}P<.01$

D．考察

遺伝的に規定されているとされる両親の気質は児の外向性問題行動に影響を与えておらず，父親の自己志向性が高い，つまり自己責任と目的志向性が強く，臨機応変で自己受容ができる父親の子ほど攻撃的行動と非行的行動が低いという結果がでた．性格は周囲の環境との相互作用を経過して形成される特徴であることから，父親の性格が一方向的に児の外向性問題行動を規定するということを単に意味するのではなく，児の外向性問題行動が高いと父親の自己志向性が低下するという可能性も考えられるが，本研究から結論することはできない．

また，遺伝的に規定されている新規性追求，つまり探究心が強く，衝動的で，無秩序な子供におい

て攻撃的行動が多く，低い損害回避性と低い協調性，つまり不確実性に対する恐れが少なく，抑制が低く，社会的に不寛容・無関心で利己的な子供ほど非行的行動が多く見られた．両親の養育態度との関係から見れば父親が子供の自立と自律を尊重するような養育態度は攻撃性を下げるが，母親の養育態度は児の攻撃的行動と非行的行動に寄与していないという結果であった．今後，自己志向性の低い父親が児を過保護に養育した場合など，ある気質・人格を持った親がある養育態度をとったときに最も攻撃的・非行的な行動をとる子供が育つかといった研究が望まれる．また養育態度は一方向性ではないため，児との相互作用的な側面から養育態度を捉える試みも必要であろう．また攻撃的行動，非行的行動の発生，維持，増幅と減弱などを含めた説明モデルが必要であろう．

文献

Achenbach, T. M. & Edelbrock, C. S. (1983). *Manual for the Child Behavior Checklist and Revised Child Behavior Profile.* University of Vermont: Burlington.

木島伸彦，斉藤令衣，竹内美香，吉野相英，大野裕，加藤元一郎，北村俊則 (1996). Cloninger の気質と性格の７次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI)，精神科診断学，7, 379-399.

Moffit, T. E. (1993). "Life-course persistent" and "adolescent-limited" antisocial behavior: a developmental taxonomy. Psychological Review, 674-701.

Moffit, T. E. & Caspi, A. (2001). Childhood predictors differentiate life-course persistent and adolescence-limited antisocial pathways among males and females. Development and Psychopathology, 13, 355-375.

Parker, G. B., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology 52, 1-10.

Rutter, M., Giller, H., Hagell, A. (1998). Antisocial behavior by young people. Cambridge University Press.

坂野雄二，佐藤健二，佐々木和義，久保義朗，坂爪一幸，土肥夕美子，市井雅哉 (1995). Child Behavior Checklist (CBCL) 日本版による自閉性障害の診断と評価: CBCL の臨床応用可能性の検討．安田生命社会事業団研究助成論文集 31，32-41.

Tomita, T., Aoyama, H., Kitamura, T., Sekiguchi, C., Murai, T. (2000). Factor structure of psychobiological seven-factor model of personality: a model revision. Personality and Individual Differences 29, 709-727.

厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）研究報告書

青年期の対人的怒り感情

―連日電話インタビュー法による研究―

分担研究者
大渕　憲一　　東北大学大学院文学研究科人間科学専攻

研究要旨

青年期の人間関係の特徴を対人感情の観点から理解するために，彼らが経験した怒りについて毎日電話でインタビューし，対象，反応，動機などについてたずねた．25名の高校生から合計121個の怒り経験が得られた．怒りは家族や友人など親密な対象だけではなく，初対面の対象に対しても同じように経験されていた．怒ったときの彼らの行動を聞くと，攻撃反応は予想外に少なく，怒りに対する彼らのもっとも典型的な反応は回避だった．回避反応は，周囲の人との調和を維持したいとか，孤立したくないといった社会的受容願望によって動機づけられており，日本人の葛藤回避傾向が彼らの間で顕著に見られた．反応には男女差が見られ，男子は親密な対象（親や友人）に対する攻撃反応が多かったが，これは関係を強化したいとする親和的動機を含んでいた．一方，女子には対話という社会的成熟度の高い反応が比較的多く見られ，彼女たちは知人などフォーマルな社会的関係における葛藤に対しても適切に対処できるスキルの高さを示した．教師は高校生たちにとって主なストレス源のひとつと考えられ，教師の不適切な行動に対して高校生たちの反応は概して冷ややか（回避あるいは拒否）なもので，寛容的ではなかった．

A．研究目的

感情については様々の見方があるが，その一つに，感情が自己と環境の適合性を表す内的信号であるという考え方がある（戸田, 1992）．正の感情は適合性が良いことを，負の感情は自己と環境の関係が変調であることを示すものである．負の感情の中で不安や抑うつは，不適合の原因が主として自己の側にあること，自己の側に環境からの要請や圧力に適応的に対処する資源が不足していることを告げるものであり，一方，怒りは主として不適合の原因が環境側にあること，自分が不当な扱いを受けていることを告げるものである．

我々は上記の信号説に基づき，怒り感情が個人にとって人間関係の調節に利用されていると仮定する．まず第1に，怒りは自己と他者の関係が不適切であることを示す信号である（怒りの感情体験）．第2に，人間関係に関して怒り感情が持つ重要な役割は，人付き合いを規制している関係規範を浮き彫りにすることである．関係規範とは，人間関係をガイドし，規制している暗黙のルールで，「友達どうしは・・・しなければならない」とか「教師は生徒に対して・・・でなければならない」といったふうに，ある一定の関係にある他者に対して個人が期待する行動であり，また，自分自身も相手の期待に従って，そのように行動すべきであると信じているものでもある．人間関係が円滑に進んでいるときには人々は関係規範を明確には意識しない．一旦，不都合なことが起こると，即ち，他の人が関係ルールを逸脱すると，何が起こったのか，どんなルールが破られたのか認知する前に怒り感情が生じ，個人は何か不都合な事態が発生したことを知るのである．

怒りの人間関係機能の第3の側面は，不適合な状態を改善するよう個人を促すことである（怒りの反応）．怒りの反応には，人の行動を変化させて侵害された関係規範を修復しようとすることもあれば，あるいは，自分自身の行動を変化させて関係そのものを変質させようとすることもある（「友達づきあいはやめよう」と決意する，等）．このように関係の改善といっても様々なやり方があり，どのような方向で，どのような状態に向かって改善をはかるかは，個人の価値観，願望，パーソナリティによって影響される．このように，怒りの反応を方向付ける内的要因を怒りの動機とよんでおり，これも怒りの人間関係調整機能の一側面である．

本研究の主旨は，怒り経験を通して高校生の人間関係に対する認知や態度を探ることである．昨年度の研究では回顧法を用い，過去6週間の怒り

経験を男子高校生に想起させて，その経験を自己評定させた（大渕，2003）．その結果，彼らの8割が怒ったときに何らかの攻撃的反応を行い，5割は暴力的反応を行ったと回答したが，これは成人を対象とした類似の研究結果（大渕・小倉,1984）と比較して，男子高校生の高い攻撃性を示すものだった．また，昨年の研究では，高校生たちが怒りは主な対象として家族，友人など親しい関係にある人たちをあげたことも特徴であった．

しかし，こうした特徴は高校生の感情経験の実態を正確に反映したものだろうか．回顧において自分に有利なように記憶が変容されるといった歪み，あるいは，特に深刻な経験だけを想起するといった標本バイアスの影響があるのではないだろうか．こうした理由から，本研究は，以下に述べるような連日電話インタビュー法によって高校生の怒り経験の特徴について再検討を試みた．これが本研究の第1の目的である．

昨年は攻撃反応のみを調べたが，典型的な怒り経験である対人葛藤の研究では，葛藤時においては対決（攻撃）だけでなく，協調（対話）や回避など他のタイプの反応も生ずることが見いだされている（福島・大渕, 1997）．日米比較研究では，葛藤に対する反応として，日本人の間では回避が優勢であった（Ohbuchi & Takahashi, 1994）．高校生の怒り経験では，昨年の研究が示唆するように攻撃反応が主たるものだろうか．それとも，日本人の葛藤スタイルと一致して，回避反応が多く見られるのであろうか．本研究の第2の目的は，怒り経験におけるこうした反応タイプ間の比較を行い，これを通して高校生たちの怒り反応の特徴を明らかにすることである．

怒りに対する反応に様々のものがあるとして，それは対象によって異なるだろうか．相手に対して親密な気持ちを持っていると，これは理解や同情などを喚起しやすいので，攻撃反応は抑制され協調的反応が生じやすいと思われる．しかし，昨年の結果では，攻撃は親密な対象に対しても行われており，この理論的予測とは矛盾する．それ故，本研究では，第3の目的として，攻撃以外の反応タイプを含め，対象間で反応タイプが異なるかどうかを検討することにした．

対象による反応の違いは動機の違いを暗示するものである．怒りは人間関係の中で生ずるので，怒りには「相手を罰したい」などの新しい動機を発生させるだけでなく，「親密な関係でいたい」など，それ以前に働いていた社会的関心や願望を変化させるという効果もも考えられる．攻撃反応を促進する動機として代表的なものは公正回復あるいは報復・制裁である（大渕, 2000）．これは，相手の不正を咎めたいとか罰したいとする願望である．一方，攻撃を抑制する動機としては寛容性があげられる（McCullough et al., 1998）．これは「相手の気持ちも分かる」とか「誰にもで間違いはある」といった理解や共感の気持ちである．また，対話などの協調反応を促進する主要な動機は「関係維持」である（大渕・福島, 1997）．さらに，組織内葛藤の研究によると（Ohbuchi et al., 2000），集団内の秩序や和を重視すると「ことを荒立てたくない」という気持ちが強まり，腹が立っても我慢するといった回避傾向が生ずる．これが日本人の葛藤回避傾向を生み出す社会的調和動機であるが，高校生においても同じ動機よって怒りに対する回避反応が生ずるであろうか．このように，反応と動機の関連を検討することが本研究の第4の目的である．

B．研究方法

参加者と手続き　参加者は，高校生25名（男子16名，女子9名）で，平均年齢は17.7歳，ほとんどが高校3年生である．男子に対しては男子大学院生が，女子9名に対しては女子大学院生が，2週間にわたって毎夜，電話インタビューを行って，その日経験した怒りについてたずねた．インタビューでは，その日経験した怒り感情について，参加者から出来事と対象について自由に記述してもらい，引き続いて質問項目を呈示して，その経験を尺度に従って評定させたり，選択肢から回答を選ばせたりした．現在，合計121個の怒り経験（男子61ケース，女子60ケース）が得られており，本報告ではこれについての分析結果を述べる．

質問項目　怒りの強度については「あなたはそのときどれくらい腹が立ちましたか」，「今も腹が立っていますか」と聞き，当時及び現在についてそれぞれ5段階評定（1-5）させた．

怒りの対象については，年齢，性別，それにどんな相手かを自由に記述させた．記述された内容を「父親」「母親」など24カテゴリーに分けたが，本報告では，「家族」（親，兄弟，その他の家族，親族），「友人」（友人，恋人），「教師」，「知人」（知り合い，顔見知り），「初対面」（知らない人）の5カテゴリーにまとめ直して，分析に用いた．

怒りの反応については，「そのとき，あなたはどんなことをしましたか」と聞き，6項目を呈示してそれぞれ5段階評定させた．これらは表1に示すように，身体的攻撃，言語的攻撃，対話，回避を測定するものである．

怒りの動機については，「あなたが上記のような行動を示した理由は何ですか」と聞き，表1にあるような14項目を示して，5段階評定させた（1-5）．これらは，調和・受容，関係維持，寛容性，公正

回復を測定するものである．調和・受容とは，「事を荒立てることによって周囲の人たちの間に波風を立てたくない」「それによって自分が社会的に孤立したくない」といった社会的懸念や受容願望を表すものである．関係維持とは，怒りの原因を作った相手との関係に傷つけたくないという願望である．寛容性は，相手の気持ちを理解しようとしたり，出来事を大目に見ようといった気持ちである．公正回復は，受けた被害を挽回したいとか，正義を回復したいとする願望である．

反応と動機の得点はそれぞれを測定する項目の単純平均値とした．そのほか，インタビューでは，怒りの原因，出来事に対する評価，経験の再評価なども聞いているが，今回の報告には含めなかった．

C．結果と考察

怒りの対象　収集された121ケースを参加者の性別と怒りの対象によって分けたものが図1である．全体としては，初対面の対象に対する怒りが最も多く，ついで，友人，家族などに対して多かった．昨年の回顧的研究では，高校生たちは親しい対象に向けた怒りを多く報告したが，今回の連日インタビューでは，初対面の人に対する怒り経験も数多く報告されている．怒りを経験したその日のうちに聞くという今回のやり方の方が高校生たちの実際の怒り経験を正確に捉えているものとみなすことができる．数週間後に回顧させるというやり方では，多分，標本バイアスの影響があると思われる．親密な対象は接触頻度が高く，接触するたびに過去の嫌な出来事を再生させられ，これによってその出来事が記憶に定着しやすいものと思われる．また，問題が未解決の場合には，接触するたびに不快な感情が喚起されるので，怒りの持続性や反復性も親密な対象に対して生じやすいように思われる．こうした理由で，回顧的方法では親密な対象に対する怒りが多く報告されたものと解釈される．

男女差についてみると，検定結果は非有意だが（$\chi^2(4) = 4.06$, ns），女子は家族に対して，男子は初対面の対象に対して怒りを感ずる傾向が見られた．女子は家庭を中心に活動し，男子は家庭外の人間関係にも積極的に参加するという男女の活動範囲の違いによるものかもしれないが，男女の対人的関心の違いを反映している可能性もある．女子は男子よりも家族など親しい人たちに対して多様な欲求や関心を向けており，その分，期待はずれだったり，裏切られたと思ったりして怒りを経験することが多いのではないかと推測される．

怒りの反応　図2は反応の評定平均値，図3は反応比率である．図3は，評定値が2（「少しした」）以上の反応を行った参加者の割合である．これら二つの図は非常によく似ており，いずれも回避反応が圧倒的に多かった．言語的攻撃と対話も少し見られたが，身体的攻撃はわずかだった．粗データを見てみると，身体的攻撃は3ケースにのみ見られ，いずれも男子が同性の友人に対して行ったもので，深刻な争いというものではなかったようである．

この結果は，怒りに対して回避反応が顕著であったことを示している．比率では90%以上のケースにおいて回避反応が見られた．この回避傾向は，研究方法は異なるが，成人よりも顕著である（大渕, 1997）．攻撃反応だけを調べた昨年の研究では高校生の攻撃反応傾向の強さが見いだされたが，今回のように，他の反応タイプも同時に調べてみると，実際の怒り経験では，高校生においても回避のような消極な反応がむしろ一般的であった．高校生たちは，人との間に問題が生じても，建設的にも破壊的にも積極的にこれを解決しようと行動を取ることは少なく，我慢したり無視したりして，不快な出来事には関与しないという強い回避的スタイルを示していた．葛藤時における回避傾向は日本人の特性と考えられているが，なぜ高校生において特に顕著なのかについては動機との関連で後ほど考察する．

評定値に関する性別x反応の交互作用が有意だったことは（$F(3,357)=3.67, p<.05$），反応に性差があることを示している．図から判断すると，男子は言語的攻撃と回避が多く，女子は対話が多いと言えよう．

対象別に反応の性差を調べたところ，言語的攻撃と対話において有意な性差が見られた．言語的攻撃に関しては性別，対象の主効果，対象x性別の交互作用ともに有意で（$F(1, 111) = 8.58$,; $F(4, 111) = 6.68, 3.71, p < .01$），図4に見られるように，男子は女子よりも攻撃的だが，家族や友人など親しい対象に対して特に攻撃的だった．女子が男子よりも攻撃的だったのは教師である．男女とも，知人，初対面など親しくない対象に対する攻撃反応は少なかった．親しい対象に向かって攻撃反応が行われやすいという現象は成人にも見られるが（大渕, 1985），これは，文句を言ったり，咎めたりといった適度な言語的攻撃は親しいものの間では互いに容認しあっていること，相手の反応が予測できるので強く抑制する必要がないことなどが理由と思われる．一方，よく知らない人が相手の場合には，明瞭な根拠がない限り，非難めいた言動はマナー違反として逆に非難の対象になる可能性があるし，相手がどんな反応をするか分からない状況では，攻撃反応は危険な結果を招く恐れも

あるので慎重になるのであろう．こうした理由で社会的経験の乏しい高校生の場合には，よく知らない対象に対する攻撃反応は抑制されることが多いと思われる．

図5は対話反応を対象別に見たもので，対象の主効果と性別の交互作用効果が有意（$F(4,111)=3.44, p<.05; F(4,111)=2.15, p=.079$）だった．男子は家族や友人など親密な対象とは穏やかに対話できるようだが，女子は男子に比べると，家族との対話が少なく，その代わり，知人に対する対話が男子に比べて顕著に多かった．

高校生の怒りの反応を見ると，どの対象に対しても回避が優勢だったが，家族や友人など親密な対象に対しては，相対的に見て，言語的攻撃や対話など積極的反応が多く見られた．特に男子においてその傾向が強く，友人に対しては攻撃的になる男子が多かった．このことは，男性の友人どおしでは，言語的攻撃を互いに容認し合っていることを示唆している．

教師，知人，初対面の対象に対しては，回避傾向がいっそう強まった．親しくない人たちに対しては，高校生たちはたとえ腹が立つことがあっても，感情を隠して，回避的な行動を取ることが多かった．ただし，知人に対して女子は男子よりも対話を試みることが多く，回避は相対的に少なかった．このように，中間的で非個人的関係においては，女子は男子よりも理性的で建設的行動を取ることができるようである．このことは女子の社会的成熟度の高さを暗示するものと思われる．

怒りの動機　図6から図9は4種類の動機の強さ（評定平均値）を対象別に示したものである．周囲の人目を気にする調和・受容動機は，比較的親密でない関係，学校やバイト先などフォーマルな場面で喚起されやすかった．教師を対象にした怒り経験で特に強かったことは，それが教室など集団場面での出来事であることを意味している．高校生たちが教師に反発するなど目立つことを嫌い，これによって同級生から孤立することを恐れる気持ちなどを表すものと思われる．家族（ほとんどのケースで父母）に対して女子の関係維持動機は非常に弱く，男子は反対に強かった．対照的なのは教師で，これに対しては女子の方が関係維持の動機が強かった．この年代の女子は父母に対して反抗的な気持ちが強く，それ故，親との間で対立が起こったときには強く反発して親和的な気持ちをもてなかったものと解釈される．彼女たちは，むしろ教師など家庭外の大人との間で信頼関係を構築したいと思っているように見える．これに対して男子は親に対する愛着がまだ強いようで，ここにも社会的発達の男女差がうかがわれる．

共感や理解を含む寛容動機は，男子が家族に対して，女子は友人に対して生じやすかった．知人や初対面など親密でない対象にも寛容動機は起こったが，教師に対してだけは低かった．むしろ，教師に対しては公正回復の動機が強かったが，こうした結果は，高校生たちが教師に対して厳しい見方をしていることをうかがわせる．教師が示す不快な行動に対して高校生たちは共感や理解の気持ちをもって受け止めることは少なく，他の対象よりも批判的な気持ちになりやすいことがうかがわれる．このことは，教師が高校生たちにとって特別な存在であることを示唆している．指導者であり，正しい行動を強く期待することが，そうとは思われない行動に対して激しく反発することが考えられる．また，指導・評価する権力者として恐れ，警戒しているというだけでなく，高校生たちは教師から「理解されたい」「認められたい」という保護願望も持っており，こうした期待があるが故に，教師が無理解な行動を示すと，許せないといった気持ちになることも考えられる．

動機と反応　怒りの反応はどのような動機によって生み出されるのであろうか．動機を独立変数，各反応を従属変数に行った回帰分析の結果を図10に示す．これをみると，まず，関係維持動機は対話と言語的攻撃の両方を強めていた．これらの行動は，一見，正反対の性質（敵対と宥和）をもつもののように思われるが，その背後には共通の関心，つまり，相手との関係を改善したいという願望が存在する．どちらも相手の行動変化を促す積極的な行動であるが，攻撃は感情的で強制的なやり方，対話は冷静で説得的な手段とみることができる．前者は男子に多く，後者は女子に多いことから，親和的願望を表現する際に，男子は短絡的な行動に訴えるのに対して，女子は理性的で建設的なやり方を取ることが多いと言えよう．

この図は，怒りに対するもっとも優勢な反応である回避が，周囲の人たちとの調和を保つとか，他の人たちから受け入れられたいといった動機によって促進されるものであることを明らかにしている．比較文化研究では，日本人の社会的調和に対する関心の高さが見いだされているが（大渕，1997），これは日本人の文化的価値を反映したものだと解釈されている．日本人は，人々との調和的関係を重視し，何が正しいかという問題はさておき，争いや対立が起こること自体が悪いことであるとみなす傾向がある（Ohbuchi, 1998）．日本語には「事を荒立てる」とか「事を構える」など，対立が表面化すること否定的に見る表現が多数ある．こうしたことも，日本の調和重視の文化を暗示している．

日本人のこうした強い社会的調和関心は，一面で，社会的排斥や孤立に対する彼らの強い恐怖を

示すものでもある．日本人は人からどう思われるかを気にする対人不安傾向が強いが，これは人から否定的に評価されることへの恐れに基づいている．仲間はずれにされたり排斥されたりすることへの恐怖は日本の親と子どもの間に蔓延している．いじめは排斥への恐怖が強ければ強いほど効果的であるから，日本社会にいじめが横行する理由の一つは，それを病的なまでに恐れる心理が日本人の間に存在するからでもある．拒否と孤立への恐れは，自己の社会的評価が気になる高校生の年代では特に強いものと考えられ，これが彼らの回避傾向を生み出している考えることができる．周囲の人から孤立しないようにと，怒ったときでさえ，高校生たちは目立った行動を控えようとする傾向があると解釈することができる．

今回は測定しなかったが，日本人の回避傾向の別の要因として，葛藤解決スキルの低さを指摘する意見もある（Ohbuchi & Takahashi, 1994）．葛藤回避文化の強い社会においては，大人は子どもどうしの争いにすぐに介入し，その鎮静化を図る．自分たちの手で葛藤を解決する経験が少ない日本の子どもたちは，葛藤を適切に解決するスキルの習得が不十分である．このため彼らは，実際に問題が起こったときに，どう対処してよいか分からないために消極的な回避をとりがちなのではないかと考えられる．本研究の参加者である高校生たちにも，このことがあてはまるのではないだろうか．

調和・受容とともに寛容性も攻撃を抑制する動機であった．これは相手の事情を理解しようとする態度である．女子では主として友人に向けられ，男子では家族に向けられることが多かった．寛容性は理解や共感に基づく動機なので，心情的にもっとも近い対象に対して喚起されやすい．この面から見ると，女子にとっては友人がそうした対象であるが，男子にとっては友人よりも親がもっとも親近感のある対象ということになる．この点も，本研究の参加者では女子の方が社会的発達の度合いが高いことを示唆している．

D．結論

本研究では，高校生の怒り経験の実態を明らかにするために，彼らが経験した怒りについて毎日電話でインタビューし，対象，反応，動機などについてたずねた．怒りは家族や友人など親密な対象だけではなく，初対面の対象に対しても同じように経験されていた．怒ったときの彼らの行動を聞くと，攻撃反応は予想外に少なく，怒りに対する彼らのもっとも典型的な反応は回避だった．回避反応は，周囲の人との調和を維持したいとか，孤立したくないといった社会的受容願望によって動機づけられており，日本人の葛藤回避傾向が彼らの間で顕著に見られた．

反応には男女差が見られ，男子は親密な対象（親や友人）に対する攻撃反応が多かったが，これは関係を強化したいとする親和的動機を含んでいた．一方，女子には対話という社会的成熟度の高い反応が比較的多く見られ，彼女たちは知人などフォーマルな社会的関係における葛藤に対しても適切に対処できるスキルの高さを示した．

教師は高校生たちにとって主なストレス源のひとつと考えられ，教師の不適切な行動に対して高校生たちの反応は概して冷ややか（回避あるいは拒否）なもので，寛容的ではなかった．

E．引用文献

福島治・大渕憲一 (1997). 紛争解決の方略．大渕憲一（編），応用心理学講座３：紛争解決（pp. 32-58）．ナカニシヤ出版．

McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L. J., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1998). Interpersonal forgiving in close relationships: II. Theoretical elaboration and measurement. Journal of Personality and Social Psychology, 75, 1568-1603.

大渕憲一 (1985). 怒りの経験における男女差の検討：身分，対象の性別及び被験者との関係との交互作用効果．大阪教育大学紀要, 34, 37-47.

大渕憲一 (1997). 紛争解決の文化的スタイル．大渕憲一（編），応用心理学講座３：紛争解決（pp. 343-367）．ナカニシヤ出版．

Ohbuchi, K. (1998). Conflict management in Japan. In K. Leung & D. Tjosvold （Eds）,Conflict management in the Asian Pacific (pp. 49-72). Singapore: Wiley & Sons.

大渕憲一 (2000). 攻撃と暴力：人はなぜ傷つけるのか．丸善ライブラリー．

Ohbuchi, K., Hayashi, Y., & Imazai, K. (2000). Motivational analysis of avoidance in organizational conflicts: Japanese business employees' concerns, strategies, and organizational attitudes. Psychologia, 43, 211-220.

Ohbuchi, K. & Takahashi, Y. (1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. Journal of Applied Social Psychology, 24, 1345-1366.

大渕憲一 (2003). 青年期の対人的怒り感情：男子高校生の怒り対象，動機，人格要因に関する

予備的分析．北村俊則（編），人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究．厚生労働科学研究費補助金「ここの健康科学研究事業」報告書（pp. 34-39）．
大渕憲一・福島治 (1997). 葛藤解決における多目標：その規定因と方略選択に対する効果．心理学研究，68, 155-162.
Ohbuchi, K., Hayashi, Y., & Imazai, K. (2000). Motivational analysis of avoidance in organizational conflicts: Japanese business employees' concerns, strategies, and organizational attitudes. Psychologia, 43, 211-220.
Ohbuchi, K. & Takahashi, Y. (1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. Journal of Applied Social Psychology, 24, 1345-1366.
大渕憲一・小倉左知男 (1984). 怒りの経験(1)：Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況．犯罪心理学研究, 22, 15-35.
戸田正直 (1992). 感情：人を動かしている適応プログラム．東京大学出版会.

表１　分析に用いられた質問項目

怒りの反応
　身体的攻撃
　　・相手を殴ったりひっぱたいたりしましたか
　言語的攻撃
　　・相手を言葉で責めましたか.
　　・相手にあやまるよう言いましたか.
　対話
　　・問題について，相手とおちついて話し合いましたか.
　回避
　　・その時，相手とかかわるのを避けましたか.
　　・いつもと変わらないようにふるまいましたか.

怒りの動機
　調和・受容
　　・その場の雰囲気を壊したくなかったから.
　　・ほかの人たちに嫌な思いをさせたくなかったから.
　　・周りの人から，変に思われたくなかったから.
　　・周りの人から，孤立したくなかったから.
　関係維持
　　・お互いの理解を深めたかったから.
　寛容性
　　・相手の気持ちも分かると思ったから.
　　・相手に嫌な思いをさせたくなかったから.
　　・たいしたことではないと思ったから.
　　・人付き合いではよくあることだから.
　公正回復
　　・自分をもっと公平に扱ってもらいたかったから.
　　・不公平を解消したかったから.
　　・ものごとのすじを通したかったから.
　　・自分のプライドや面目を保ちたかったから.
　　・自分に対する周囲の評判や印象を回復したかったから.

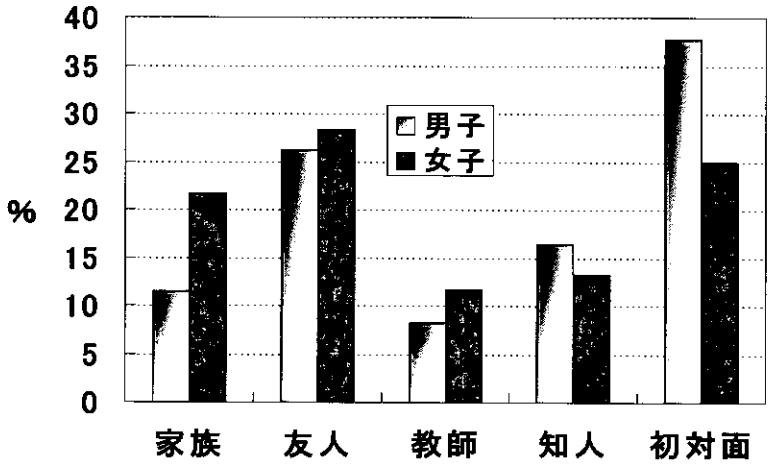

図1　怒りの対象

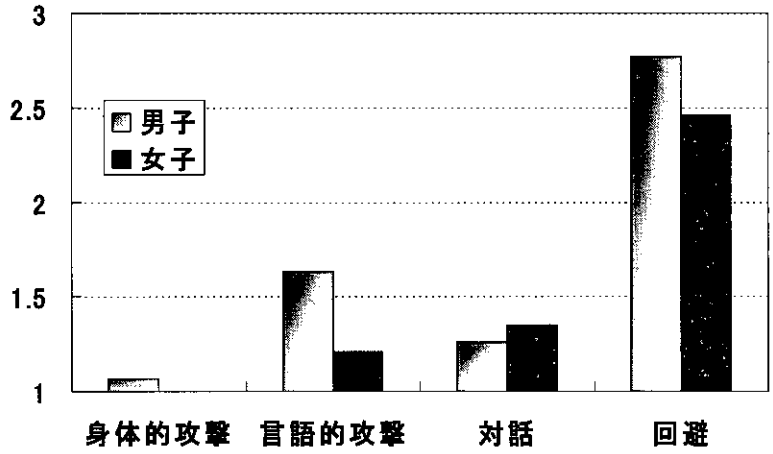

図2 怒りの反応:平均評定値

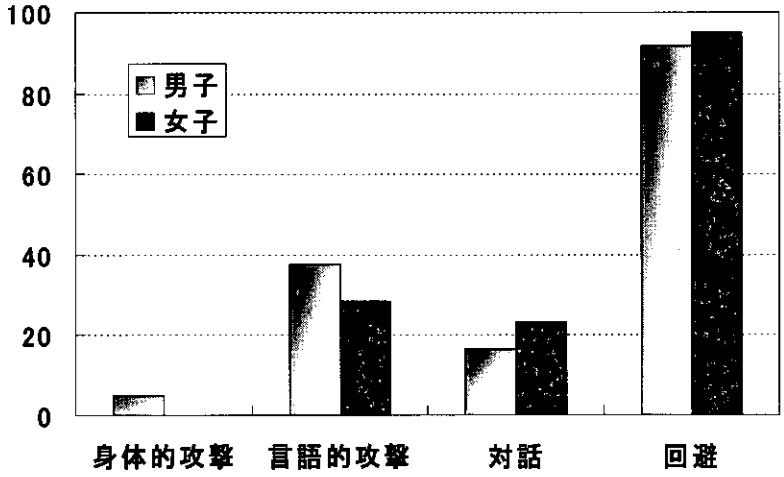

図3 怒りの反応:反応比率

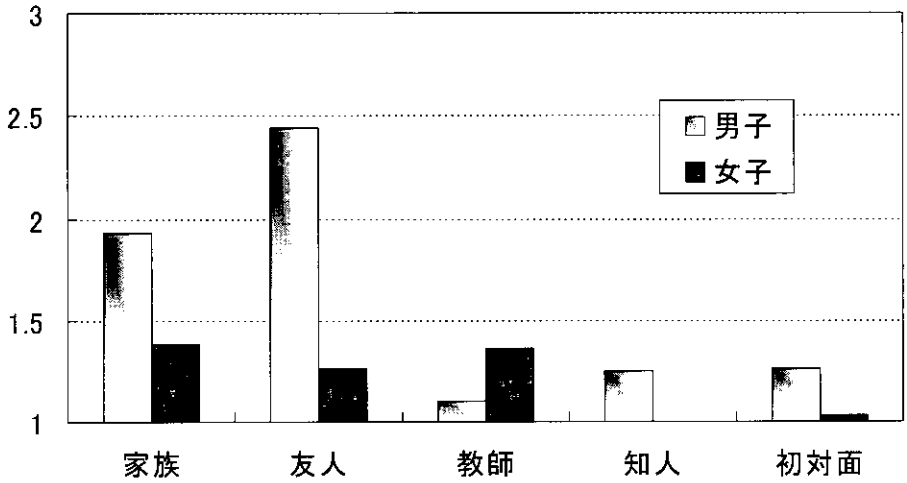

図4 対象別言語的攻撃反応

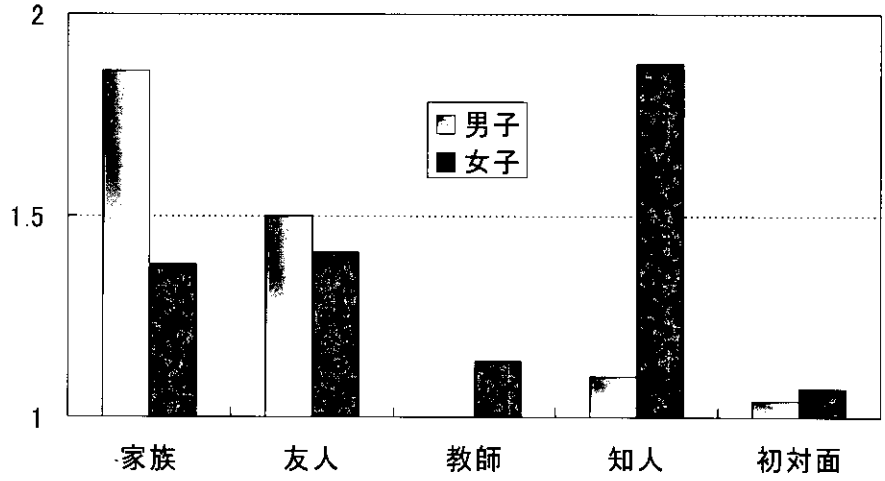

図5 対象別対話反応

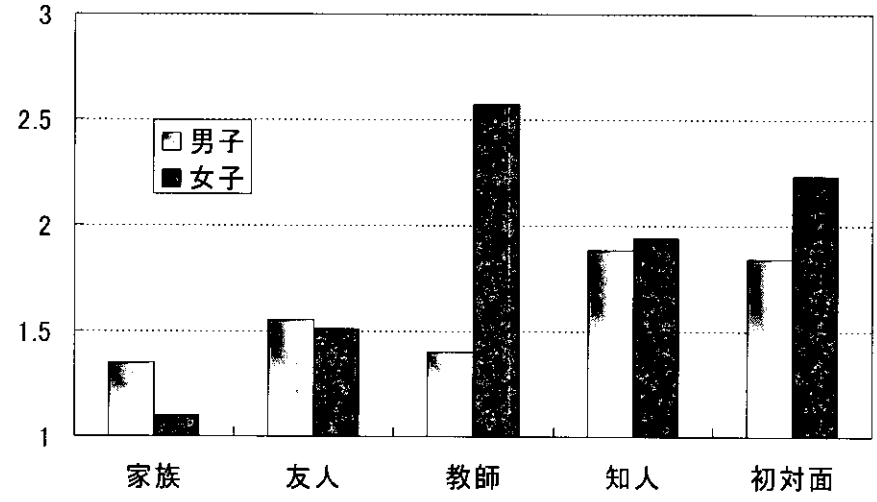

図6 対象別調和・受容動機

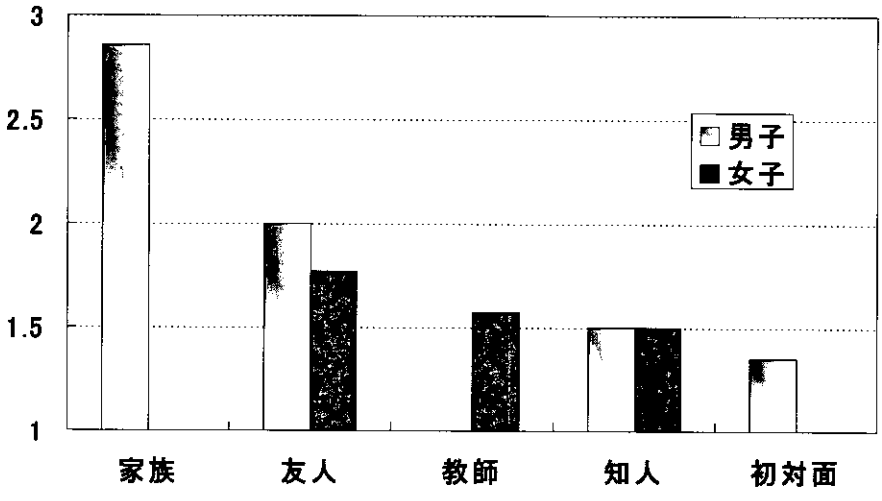

図7 対象別関係維持動機